# 春夏秋冬　The Season Story

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬　Ｔｈｅ　Ｓｅａｓｏｎ　Ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】

Ｎ１０６５Ｉ

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

大学生になった春の物語である。

# 第一章　（前書き）

これぞ純情ラブストーリー決定版。さあ、オルヴォワ

# 第一章

## 第1話　ｓｐｒｉｎｇ　ｄａｙ

春の風、雪がとけ、春風とともに桜が咲き乱れ、春がやってきた。とうとう僕も大学生だと喜びのあまり歓喜を隠し切れない。とりあえず今日は大学の初日なので、スーツを着て、ネクタイを着用。完璧だ、まさにＰｅｒｆｅｃｔ　ｈｕｍａｎである。つまり、訳すと完璧人間。用意も完璧さあ、いざゆかん大学へとマンションの部屋から出ようドアを勢いよくそう、釣りでいうと魚がＨｉｔした感じで開けた。

「いたっ」

っと声がしたのに僕は反応した。これは、やべーよ。怖い人だったらどうしよう。これは大変なことになったら大変だ。大変と二回使うほど、僕の頭は鳥のように飛んでいた。とりあえず僕は謝った。心の奥底ではないが、世間一般から見ても謝っているという誠意が伝わるぐらいに。

「すいません、大丈夫ですか」

と声をかけながら、恐る恐る倒れている人をチラミした。どれくらいかというと、パチンコに行って自分の台ではなく人の台を見る感じである。すると倒れていたのは女の子のだった。僕は女の子に手を指しのばしながら観察していた。大きなリボンをしていて髪はロングであった。服は着物を着ていた。年はたぶん１８以上だと思う。顔はととのっており、美人だと思ういや、僕好みだ。僕のスゥィーティな心のスカンターが爆発した。戦闘力が測れない。と考えている途中女の子の方から返事が返ってきた。

「ええ、すいませんこちらこそ、ぼーーとしていたので、それでは」

女の子が去ろうとした瞬間、僕はとりあえず彼女を呼び止めなければと考えていたが、行動に移せず、ただ彼女を見守っていた。そう、

あの名犬見たく。それから１０分位たった後、僕は、はっと我に返り、やばい、もう時間だと、大学の入学式に向かった。大学まではここから１５分位歩いた先にある。結構マンションから近い所だ。僕は急いで大学に向かった。なぜなら、友達と待ち合わせをしていたからだ。

大学に向かっている途中でも、今朝出会った彼女の事が頭でいっぱいであった。

よく、綺麗な人に言う言葉があるだろう。

立てば芍薬（しゃくやく）座れば牡丹（ぼたん）歩く姿は百合（ゆり）の花って。

まさに、その通りであった。胸の高まりを抑えられぬまま僕は浮かれていた。

待ち合わせ場所では高校からの友達である泉　佑樹が待っていた。

彼の姿は頭がアフロで、背中に誠と新撰組のスタイルをしていたが、僕はツッコマなかった。だって彼女の事で頭がいっぱいだったから。

「遅いぞ、早くクラスを見に行こうぜ」

僕達はクラスを見に行った。いや、見に行こうとしたが、クラスを見に行く場所は知らなかった。とりあえずいっちゃん（泉佑樹）に聞いた。

「クラスってどこの場所で見るの」

僕は聞いて見た。

「知らね」

分かりやすい答えであった。

とりあえず周りの人に聞く作戦でその場をしのごうとし、僕は周辺を見回した。するとそこには朝、僕（ドア）とぶつかった彼女がいた。これは、まさに運命いやデスティニィー、ただ英語にしただけだが、英語の方がかっこいいから。まぁ、それはどうでもいいが、僕は心から神様に感謝した。ありがとう、神様、僕はあなたを信じます。だって、彼女ともう一度出会えたから。僕はとりあえず深呼吸をした。そして彼女に聞いてみようと思った。よしっと自分の手に人という字を三回以上を書いて、たとえるなら腹痛のとき正露丸を飲むよう

に飲んだ。
「あのう、すいませんクラス表ってどこでみれるのですか？」
と聞いてみた。
「それなら私も今から見に行くのでよろしければ案内しますよ」
優しい笑顔で言ってくれた。そして彼女は思い出したように、ああっと驚いた表情をしながら言った。
「ああ、今朝の人」
「はい、今朝のドアをぶつけた人です。本当にすいませんでした」
「いえいえ」
彼女は気にしてないよという顔で答えてくれた。
僕は今言った言葉に後悔していた。何、あの、今朝のドアをぶつけた人ですって、馬鹿、俺カバ、違うだろ、そんな言葉はいうんじゃねぇーよ僕。二度と言うなよ。僕のカバじゃなくて馬鹿。そんなことを思いながら、僕のことを認識してくれていたようでうれしかった。まあ、一般的に見れば忘れないけどね、３０分ぐらい前だから。しかし、もしこれで、誰と言われたら。僕死んじゃうぐらい、ショックを受けていたに違いない。よかった。本当によかった。
すると彼女が聞いてきた。
「あなたもこちらの大学に入学したんですか」
「ええ」
僕は答えたが、いままさに僕の心臓が爆発しそうであった。君との出会いにより。マジで恋する5秒まえって感じである。いや、もうすでに恋しちゃってます。恋に盲目しています。これはチャンスだと僕は思った。いや、これを逃すと二度とない。というか一生ない気がするので、すかさず名前を聞いた。
「ええっと、僕の名前は、無敵　王、君の名前は？？」
すると彼女は優しい笑顔で答えてくれた。
「これはこれは、自己紹介がまだでしたよね。私の名前は平等院（びょうどういん）春（はる）といいます。春と呼んで下さいな」
彼女は言ってくれた。これが彼女（平等院　春）との出会いの始ま

りだった。
僕は、春の日、ｓｐｒｉｎｇ　ｄａｙを感じていた。

## 第二集（前書き）

季節の変わり目それは繰り返しである。余談だが相棒とこん棒はよく似ていると思う。

## 第二集

大学が始まって一日目がすぎた。ところで、前にで出会った彼女（平等院　春）とは、なんと大学が同じで、マンションも同じで、それにお隣さんである。これを気に一緒に大学に通えたらなーと思っていた。ふふふっそして、あーんなことやこんなことができたらいいなぁーー。おっと、いけない、いけない慌ててはだめだ。慎重に行かなくては、とりあえず気分を落ち着かせるためにベランダに出てみた。気持ちいいなー、さすが春、いやＳｐｒｉｎｇ、良い風だ。よし、明日の朝、彼女を誘って、学校にいくぞーー。でも断られたらどうしようかーー。大学始まって二日目でノックアウトはだめだ、だめだーーー。とか、考えていると、隣のベランダかた、彼女が現われた。どうする、何か声をかけるべきか・・・。

くそーー、予想していなかった、いや、うそ、本当はしていたが、あまりにも早すぎて考えが浮かばない。しまった、これならせっかく買った、ベランダでの彼女の過ごし方を読んどくべきだった。定価１３５００円もしたのに、くそ、俺のばかばかばかばかかば、と心のなかで叫んでいると彼女がこちらに僕がいることに気づいた。そりゃそうだ、あれだけベランダで騒いでいたら気づくよね。

「こんばんわ、いい眺めですね」

彼女は声をかけてくれた。ぼ、僕はまるで、雪合戦で使う、雪の中に石をいれたみたいに硬く、そして緊張していた。震えた声で返した。

「こ、こ、こんばんわ・・」

すると彼女は

「明日から大学生活始まりますね」

と話してくれた。

「そ、そうですね」

と返したが、心の中では、馬鹿、僕のばか、もっといい返答がある

だろう。例えば、ベランダの景色よりも君のほうが美しいとか、いや、春の風も気持ちいいけれど、君のほうが気持ちがいいよとか、いや、待てよ今のはだめだ。ＮＧだＮＯ　ＧＯＯＤだ。落ち着けとにかく落ち着け、もち付け、よしナイスジョークだ。僕は落ち着いている。よし、いうぞ、いくぞ、いくぞーーー。彼女の顔を見つめた。彼女の瞳に吸い込まれそうになっていた。

「んっ何か」

彼女は答えてくれた。

「えっ、とですね、あ、、明日、、も、もしよかったら、た、たいやきに行きませんか。」

「たいやき???つぶあん?こしあん?」

ちがうだろーー、たいやき、ましてやタコ焼きでもねぇ、大学だよ、どうやったら間違うんだよ、俺のばかばかかば。大学だろ、大学。くそーーこういうときに限ってＮ○Ｋの電波が俺を惑わすーーーー。くそ、テレビさえ見なかったら、たいやきなどという言葉は出てこなかったのにーーー。毒電波のせいだーーーと僕は頭を抱えながら悩んでいると。彼女が心配そうに声をかけてきた。

「大丈夫ですか」

僕はたいやき、タコ焼きを頭から消したが今度は、フランクフルト、かき氷が頭の中に浮かんでしまったーー。くそーーＮ○Ｋの毒電波の奴どうして夜店特集しているんだよ。気になって見てしまうだろ、こんなときに限って、まじかるばななみたいに連想してしまう。くそ、落ち着け、ＣＯＯＬ、ＣＯＯＬになれ俺、これだけのことを考えていたが、彼女の大丈夫の一言からまだ０．５秒しかたっていません。よし言うぞ。

「たいやきでもタコ焼きでもフランクフルトでもありません」

何を言ってるんだ、おれ違うだろ早く用件を言うんだ。

「だ、大学に明日、一緒にいきませんか・・」

よし、言えた。ナイス俺、やればできるじゃないかとか考えていた。

「ええ、いいですよ。」

えっ、と驚いていた。それと同時に自分を褒めていた。お前はすごい奴だ。
「ま、まじっすか」
「ええ、それでは、朝誘いますので、おやすみなさい」
「おやすみなさい」
その言葉の後に彼女は部屋に戻った。僕は、感動と興奮が湧き出て止まらなかった。
たぶん、それから３０分ぐらいベランダにいただろう。
僕は、春の風、ｓｐｒｉｎｇ　ｗｉｎｄを感じていた・・・・・。

# 第3章　（前書き）

さて、こん棒と相棒はよく似ている

# 第3章

大学生活も順調なすべりだしである。色々あったが、もうじき夏が来る。
そう、恋の季節がやってくる。サマーラブがね。
しかも、隣に住んでいる春とは、おっと呼び捨てしちゃった。毎日っていうか、大学がある日は一緒に大学に行っている。だが、まだ、友達以上恋人未満という感じである。最初は、一緒に学校に行くと決まってから、朝まで眠れなかった日が続いた。毎日寝不足で5キロ痩せた。だが、僕は、初めてあった時から決めていたんだ。絶対にぜーーったいに告白すると、失敗したら、どうしようかとも、思ったが、今のままでは絶対にいけない、というか我慢ができない。そう、三分のカップラーメンを二分三十秒でフタを開けて食べてしまうというくらい我慢できない。僕は固いめんが好きなのさ、別に関係ないけどね。明日だ、明日こそ告白するぞーー。もうこれ何回言ったか忘れたけど。
次の日、だめだった。今日も告白できなかった。僕って弱虫。この弱虫、いも虫、毛虫が。そうなんだ、一緒に学校に行くと決めた日から告白しようとして、かれこれ三ヶ月になる。ついつい、彼女の前に立つと緊張してしまう。そう、こんなこともあった。
「は、春さん」
「何、無敵くん」
「きみ、気味気味きみ、みきみきみっきーまうちゅが好きです」
「へー無敵君って某有名企業が好きなんだ。私も好きよ」
あの時は、おしかった、まさか君がみっきーになるとは、自分の柔軟な頭を
呪ったね。あと、自分で言ったけど、恥ずかしかったね。
だが、しかしこんな弱虫であった僕にも彼女との距離が一気に縮ま

ったんだ。
そう、それは一緒に帰っている途中、あの有名な映画、「１００万回のプロポーズ」を参考に告白を実行したんだ。
「は、春さん」
「何、無敵くん」
「見ていてくれ」
僕は道路に飛び出した。そのとき、車が前に向かってきた。
「ぼ、僕は、君がすっ・・・・・・・」
好きと言おうとした瞬間ドッカーンと車に引かれたのさ。映画では止まるはずだったけどなーと考えていると彼女がやってきた。
「だ、大丈夫!?」
「僕は、死にましぇーーん」
これで、ちょっと違うけど、彼女は僕に惚れたなと思った。
「そう、よかった、救急車いま呼んだからね」
あ、あれ映画だと、私、あなたが生きていないと死んじゃう、死んじゃうわって言ってくるはずなんだけどな、また失敗か、仕方がないなと思いつつ、なぜかやり遂げたという満足感をだしながら僕は気絶した。
今思うと、自分でもようやったなと思うね。
夏の日が近づいてきた。ｓｕｍｍｅｒ　ｄａｙの予感を感じた。

## 第４集（前書き）

相棒とハードボイルドの関係は以下に？

## 第４集

そうそう、実はまだ続きがあるんだ。
僕は思い出していた。
先日、車の前に飛び出した、僕は救急車に運ばれ、精密検査を受けた。
特に怪我とかもなかったが、医者に「君、頭大丈夫？」と言われたが、よけいなお世話だってぇーの。とりあえず、マンションに帰宅した。
「あーあ、暇だな、実家にでも帰ろうかな。バイトもないし」
無敵王がぼーーとしているとき、誰かが、尋ねてきた。
「ピンポーン」
「はーい、今、出ますよ」
無敵王は玄関にむかった。そして、驚愕した。
「おいっす。体は大丈夫だった？」
な、ななななな、なは８回、なに、なぜ、ＷＨＹ？なぜ、春さんが僕の部屋に。し、しまった。今、僕は、Ｔシャツに、短パンの格好をしていた。
「な、ちょっと待って、着替えてきます」
「お気になさらず」
「気にしますよ。しばらく待っていてください」
どたばた、どっごーん。無敵王は急いで、着替えた。タキシードに。この間３６秒の出来事であった。
「やあ、おまたせ。ど、どうしました。今日は」
落ち着け、僕、こういうときは落ち着け、冷静になるんだ。ＣＯＯＬ、ＣＯＯＬ、ＨＯＴって熱くなってるじゃん。
無敵王が慌てているとき、春が話してきた。
「いや、体大丈夫かなって思って、様子を見に」
無敵王は感動していた。さすが、まいエンジェル。まさに、やまと

なでしこ。
「んっ、どうしたの。まだ体の調子悪いの。もし、よかったら、明日映画を見に行かない。実はさっき、映画の無料券を頂いて」
無敵王は、昇天しそうになっていた。
「まだ体が完治してないかな？」
無敵王は我に返り。すぐ返事をした。
「とんでもない、いま、まさに、絶好調、今なら、三分間しか地上にいれないヒーロと戦っても、三分間耐えれますよ」
「そ、そう。よかったね。それで映画はどうする。」
「ぜひ、たとえ地球がまじで爆発しても、行かせてもらいます。ぜひ、行かせてもらいます」
「うん、爆発したら行けないけどね」
さすがに、春もそこだけは突っ込みをいれた。
「それでは、明日、映画を見に行きましょうか」
「はい、ぜひ。行きましょう。さあ、行きましょう」
無敵王はこれは、チャンスだ。やはり、車の前に飛び出したのは、無駄じゃなかった。今回こそ、告白するぞーー。無敵王ふぁいっと、いっぱーつ。と心の中で、自分をエールしていた。
明日が楽しみだ。
そう、夏がきた。そう、ｓｕｍｍｅｒ　バケーションの始まりであった。

# 第5章（前書き）

固ゆで卵っていいよね。

# 第5章

夏がやってきた。そう、サマーバケーション、俺の心は、今にも、爆発しそうなぐらい、どきどきしている。
そう、どれくらいかというと、必殺技で自爆というコマンドが選択できるぐらいどきどきしている。いや、もっとわかりやすく例えるなら、おねしょをしてしまって、親に叱られるという子供の心境ぐらいどきどきしている。皆さーん。回りの景色を見てごらん。湖があり、ベンチがあり。滑り台もある。そう、ここは、公園である。ほら、あちらに見えますのが、カップルです。そしてそちらのほうにもカップルが見えます。そう、昔の僕なら、カップルにむかって、爆竹でも投げてやろうかと思うぐらい、カップルがムカついた。いや、正確にいうと、少しうらやましかった。いや少しどころじゃないさ。うらやましかったさ。なぜ、俺には、俺には、彼女がいないんだーー。とカップルを見るたびに、俺の心が泣いていた。だが、今は違う、カップルを見ると、微笑ましい気持ちになれる。今日はデートだからね。軽く、待ち合わせ場所に三時間前に来てます。なぜなら、デートですからね。僕は、もしかしたら、これは夢かもしれないと思い、通りすがりの子供を呼び止めた。
「そこの道行く子羊よ、ちょっといいかね。」
子供はこっちを向いて、言った。
「むし、むーし」
子供は無敵王から離れていった。だが、そのとき、無敵王は、脳内会議を行っていた。
「どうする」
「まぁ。許そう」
「そう、そう、許そうよ」
「今日なら許せるよ」
「うん、皆の言うとおりだ。許そう」

脳内会議の結果許すという結論になった。だが、体は、爆竹を子供に向けて、投げていた。
「ざまー見ろ、ばーかばーか」
無敵王は爆竹を投げるとすぐに、近くのベンチに隠れた。まるで、かくれんぼをしたかのように。

そう、夏の風が吹いている。ぴゅーぴゅーってね。

# 第6章（前書き）

ハードボイルドイコール固ゆで卵

# 第6章

もう夏です。花火の季節です。さっきも朝ですけど、子供たちと花火を楽しんでいました。子供たちは泣いてしまいました。よほどうれしかったんですね。さて、デートまであと2時間の時間がある。よし、この幸せな気分を皆にも伝えてあげよう。そうだ、この幸せをメールで友達の皆に知らせよう。よーしまずは、いっちゃんだ。

メールの内容
「これからデートです。今日から大人です。アディオスアミーゴ、！（・＝・）！」

よし、次はオタッキー武田だ。

メールの内容
「今日からアダルティです。デートです。うらやましいか。うらやましいだろ、アミーゴ！（，－）」

これでＯＫ。おっと返信が来た。

メールの内容
「失敗を祈る。／（－－）　Ｂｙ泉」

なんてやろうだ、普通成功を祈るだろ。何て奴だ。とりあえず返信だ。

メールの内容
「僕の人生に失敗の二文字はない。ひがみかい。／（＜＞）／」

おっとまた返信がきた。今度はオタッキー武田だ。

メール内容
「ゲームかい。まぁがんばって二次元の女の子を落としてくれたまえ。落とせなかったら、僕に聞きたまえ。僕が、いや清がすべての女の子を落としてあげよう。Ｂｙオタッキー」

いやいやいや、本当のデートだよ。なに言ってんだ、あのオタクが。しかもアイツ名前が清なんだな。初めて知った。これはきちんと返信しないと。

メール内容
「マジでデートですよ。リアルね。現実。今日デートです。女の子と」

これでよし、おっとまた返信が来たぞ。

メール内容
「君にこの言葉をささげよう。三国志Ｂｙ泉」
はぁ、意味わかんねーよ。こ、こいつは、おっとまたメールが来た。

メール内容
「いくら払った。リッチマン。Ｂｙオタッキー」
って、金払ってねーよ。まったくあいつは、なんかと間違って。しかもリッチマンって。あーもう、こいつらばかばっかりだ。んっ、メールが2件入ったぞ。

メール内容
「なんてな、デートがんばれよ。応援するよＢｙ泉」

メール内容
「冗談だよ。デート楽しんでこいよ。Ｂｙオタッキー」
あ、あいつら、いいやつらだったな。すまねぇ一瞬、疑っちまったよ。
僕は友達の友情を噛みしめながら返信した。

メール内容
「ありがとう。俺がんばるよ。」
と二人に送った。すると１０分後、とんでもないことが起こってしまった。
武田からメールが来た。

メール内容
「ふふふ、幸せな鳥さん。前のベンチをみてごらん。青い鳥達がいるよ」
んっなんだこりゃと思い。僕はすかさず、前のベンチを見て見ると、青い鳥のコスプレをした二人の男がいた。いっちゃんと武田であった。
「ちゅんちゅん」
「アラスカーナ」
くそ、やられた。あいつら俺のデートを邪魔するつもりだな。くそ、あいつらをいい奴と思った自分がばかだった。
夏の風に吹かれ、青い鳥がやってきた。コケコッコってね。

# 第7章　遅刻（前書き）

たいやきとたこやき食べたいと言えばたこやきかな

# 第7章　遅刻

今、僕の目の前に鳥たちが集まってる。小さい鳥はかわいいなぁ。だけど、不自然にでかい青い鳥がいる。
「えさくれ。大好物はお金です」
武田がぬいぐるみの鳥の衣装を着ながら言った。
うざってえ鳥だ。本当に俺は心のそこから思った。そんなとき。もう一方の鳥が武田の鳥を羽で叩いていた。
「このばかちんが、お金じゃないでしょう。こういうときはこういうのさ」
といって、泉は僕の前に来た。
「愛をください。ＺＯＯ－－－－－－－－－－－－－－」
と叫び出した。
とりあえず、俺は二匹の青い鳥にソバットをくらわした。
ドカ、ボコ　いい具合に決まった。自分でも惚れ惚れする具合に。
「ど、動物虐待だ。清はショック」
「ま。全くだ。この悪魔が。泉もショック」
「うるさい、さっさと帰れ。別に用事はねーだろうが。何が、清はショック、泉もショックだ。じゃあ、何か無敵王はショックってか、ああそうさ、言って見たかっただけだよ。ちくしょう。俺はな、今からデートなんだ。お前ら帰れや」
「何を言ってるんです。僕たちは青い鳥。そう、人はみな幸せの鳥とも言う。清的に」
「そうそう、つかまてごらんなさい。もれなく青い鳥がお供につきますとも言う泉的に」
「いらねーよ。さっさと帰れよという無敵的に」
って、写っちまったじゃねーか。インフルエンザ見たく、俺は心底こいつらが憎いと感じたね。
「まぁまぁ。まだデートまで時間あるだろ」

泉が言った。
「まぁな」
「そう、かっかするなよ。じき帰るよ」
武田が言った。
「それならいいけど」
まぁ。すぐ帰るんだったらいいか。どうせ、デートまで一時間半あるし。
「ところで、どうやってこの場所が分かったんだ。」
「それはな、武田答えてやれ」
武田が立ちあがり、話し出した。
「毒電波探知機のおかげです」
そういうと、武田はパソコンみたいなのを出しながら言った。
「アラスカーナ、オタクポケット」
「なんだよ。毒電波って、オタクポケットって、アラスカーナって何？」
無敵王は疑問でいっぱいだった。
「まぁ、慌てなさんな、坊や」
泉が落ちつけのポーズをしながら言った。
「誰が坊やだ、今回俺がツッコミ役かい？」
無敵王は正直いえば、ボケの方が好きであった。
「武田。答えてやれ」
「ふふふ、これぞ、オタクポケット。このポケットは四次元につながっています」
「マジで」
無敵王は四次元という未知の領域に心奪われていた。
「はい、うそです」
武田が答えた。
「常識考えろよ」
泉も答えた。
こ、こいつら、ちょっと乗ってあげたらこれか、こんな仕打ちをす

るとは。無敵王は腹を立ちながら、今日はデート、今日はデートと考えながら耐えながら話した。
「まぁ、いいよ。続けて」
「これは、ただのポケットです。間違わないように、間違ったら、このマジカルオタッキー武田が萌えにかわってオシヨキヨ」
「・・・・・」
「・・・・・・」
無敵王と泉はアイコンタクトをして武田を殴った。
ぼっこーーん。
「へぶし」
武田は倒れた。
「今のはあかん」
泉は冷たい目で答えた。
「同感だ。その程度ですんでよかったな」
無敵王も人を人と見ないで答えていた。
しかし無敵王は武田をぶっとばして、すこし気が晴れていた。
「では、続きを話しましょう。」
武田は話し出した。以外に頑丈だなと無敵王は思った。
「ただ単に君の携帯に発信機を付けていたから場所わかったんだよ」
武田が言った。
「そのとおり、実にシンプルな答えだ」
泉も言った。
「って、マジでーー、いつだよ。いつそんなもの取り付けやがった」
無敵王は驚きながら言った。
「それは秘密です」
泉が言った。
「ひみつ、秘密、ひみつーーの武田ちゃん」
武田は踊りながら言った。
「・・・・・・」
「・・・・・・」

俺たちはアイコンタクトをとって二人でジャーマンスープレックスを武田にくらわした。
「それはだめだろう」
泉が凍れよという目をしながら言った。
「おもしろくねーよ」
まじ、ありえなーいと言う目をしながら無敵王言った。
「あー、もう全く、仕方がないオタクだな。じゃあ、おれらそろそろ帰るわ」
泉が立ちあがった。
「おっ、マジで。なんか引き際があっさりしているね」
無敵王は少し驚いていた。
「ふふふ、それはだな・・うっ」
泉が武田にパイルドライバーをくらわした。
「よけーなことは言わなくていい。じゃあデートがんばれよ」
そして、俺の前から二人の青い鳥が俺の前から去っていった。
さて、時間はと。あーーーーーーーー。あと1分しかねーー。はやく、
待ち合わせ場所に戻らなくては、あーーだからかあいつらが素直に帰ってのは、やられたーー。とにかく急げーー。走れば、5分ぐらいで戻れる。あーーくそこんなことなら、素直に待ち合わせ場所にいとけばよかったーー。
俺は急いで待ち合わせ場所に戻った。そこには女の子が待っていた。
「はぁ、はぁ、はぁ、ご、ごめん。待った」
「うん、五分遅刻だよ。まぁいいけどね」
「ごめんなさい。二匹の青い鳥に、ってとりあえずごめんなさい」
「じゃあ行こうか。早くしないと映画始まっちゃうよ」
彼女が僕に手を差し伸べた。僕は彼女の手を握り返した。
「うん。行こう」
こうして僕らは映画を見に行った。

夏の日差しが眩しかった。彼女の笑顔も眩しかった。キラキラってね。

続く

## 第8章（前書き）

映画はいいね。映画の1、2，3とシリーズものドラマって結局同じじゃない

# 第8章

暗闇、そこはちょっと危険なワールド、いやアダルトな世界である。俺、無敵　王はいまこそ精密な計画を今こそ実行するときである。ここは映画館、ここでの目的は手をそっと繋ぐことだ。俺はこのために、このために今を生きていたんだ。やっちゃるで。ふっ、デートといえばやはり恋愛映画に限る。今日は超話題作でアカデミー賞を１００パーセント受賞するだろうという恋愛映画「あなたはコーヒーに砂糖はいくついれる」である。そうこう考えている内に映画が始まった。

「ロドリゲス、あなたコーヒーにお砂糖はいくつ入れる？」
「セニョリータ、僕は大の甘党でね。君の愛の数だけ入れてくれたまえ」
「わかったわ。ロス」
そういうとセニョリータはコーヒーを差し出した。
「ＷＨＹ～、セニョリータ砂糖が一つも入っていないよ」
ロドリゲスは頭に手を置きあたーって言う顔をしていた。
「わからないの、ロドリゲス。」
セニョリータはロドリゲスの顔を見つめた。ロドリゲスはそれに感づき答えた。
「分かってるさ、セニョリータ。もう甘すぎるっていうことだろ。ＳＷＥＥＴ僕たちの愛は無糖のコーヒーさえも甘くしてしまう。恋のラブフェロモンだからね」
セニョリータが立ち上がった。
「違うわよ、このファックロドリゲス。０個よ、愛はないの。もうあなたとは付き合えない。別れましょう」
「ＷＨＹ～。セニョリータ。なぜ、なぜなんだ」
あまりにも突然な出来事にロドリゲスは困惑していた。

そして突然画面が暗くなり、ＥＮＤの文字がでた。

〜み、短いよ。〜

俺は驚愕していたが、他の皆さんは立って拍手をしていた。俺もそれにあわせて立って拍手をした。

「おもしろかったね」

平等院　春が聞いてきた。

「う、うん」

くそ、予想外の展開だ。まさか、あれで終わるとは手も握れなかったじゃないか、始まって5分で終わる映画なんて聞いたことないよ。

「まさか、あそこで、セニョリータが分身の術を使うとは思わなかったよ」

「ぶ、分身の術？」

俺は、時計を確認した。あれ、よく見ると映画から2時間過ぎている。

まさか、あそこから寝てしまったのか、いや考えすぎていてあっというまに時間が過ぎたんだ。なんていうことだ、もしこの場に神がいたらこういうだろう。ジーザスと。

「あれ、見てなかったの？」

春は無敵の顔を見た。

「いや見てたよ。すごかったね。また見に来たいね」

「そう、よかった」

春はうれしそうな顔をしていた。俺は自分が情けなかった。まさか、回りが見えていなかったことに。そんなことを後悔しても仕方がない。まだ、チャンスがある。夜が勝負だ。俺はおもいきって春さんを誘った。

「春さん、この後、よろしかったら食事でもどうですか」

「うん、いいね。どこに行こっか」

「えっ、まじ」

「うん。いいよ」
やりました。お母さん、お父さん、おじいさん、おばあさん。女性を誘うと言うことに成功しました。俺は感動していた。言ってよかった。いつも言えなかったからよけいに感動していた。おっと、感動してる場合じゃないぞ。食事に行くんだ。
「で、ではいきましょう」
「うん」
夏の夕暮れが美しかった。彼女の心みたいに、清らかだった。

## 第9章（前書き）

絵つきです。彼が無敵　王です。さあ、オルヴォワ

# 第9章

＞i2175―259＜

今夜、僕は布団の上で今日の出来事を思い出し、ニヤケていた。よくやった、よくやったよ。俺。もし出来ることなら、部屋を出て外で叫びたい、お前はよくやったと。だが、僕は一般人だ、恥ずかしいので自分の心の中に留めておこう、そう、いつか、いつかもっと自分をさらけ出せるようになったらやろうと。

布団を被って布団の中で誰にも聞かれないように笑っていた。

「えへへへ」

だめだ、だめだ、隠しきれない。寝ろよ、寝るんだ。いや、寝なくてもいいよ自分。噛みしめろ、噛みしめるんだ。よく、年をとった人達や長く付き合ったカップルなど、デートでドキドキするのは最初だけとか、うっとうしいだけとか、めんそくせぇとか、言うこともあるけど、そんなの気にしません。僕が自分がよかったらいいんです。だって自分の人生だからね。自己満足、結構それで結構。自分が満足できているんだから。自分の意思を強く持って何が悪い。よし、こういうときは電話だ。

僕は、泉　佑樹に電話をかけた。

「もしもし、いっちゃん。マイネーム　イズ　オウ　ムテキ。起きてる、イッテル、入ってる」

「・・・・・・何。今何時だと思ってるんだよ」

「何時、親父、マジ、三時」

「・・・・・・いや、そう三時だよ。夜中のよ。分かるか、普通よ。三時って言えば何してている？」

「おやつ食べてる？」

「違うよ。それは午後三時だろっていうか、俺ツッコミ、どっちかといえばボケの方がって違うだろ」

「おっ、いいね自分に突っ込んでるね。いいよ」

「ってお前、俺、今寝てたの。ぐーぐー寝てたの。分かる夢の中にいたんだよ。お前は馬鹿か。後、なんでそんなにテンション高いんだ？」
「よくぞ聞いてくれた。それはな、俺は雲をつかんだよ。そう、雲をね」
「はぁ、そんなにクモが好きならてめぇの部屋にタランチュアを送ってやるよ」
「違うよ。雲だよ、お空にある雲」
「お前は馬鹿か。雲ってのは、空気中の水、または氷の微粒子が集まって空に浮いているもの。分かる空に浮いているからさわれないんだよ。じゃあ、俺寝るからお前も寝ろ」
「それは無理な相談だ」
無敵　王は低い声で言った。
「なんでだよ、お前、低い声で言うなよ。なんか腹立つから。もう充分だろ。気がすんだろ。俺は寝たいの。羊が呼んでいるんだよ。俺を」
「めぇーー、めぇーーーー」
「・・・・・じゃあ・・」
「ごめん、ごめんってば、切らないで切らないでお母さんファミコンのコンセント」
「・・・・・突っ込まないからな。もう眠いんだよ。要件を言えよ。頼むから」
「さすが、いい人だ。さすが親友。聞いてくれるかい」
「ああ」
「聞いてくれるかい」
「ああ」
「聞いてくれるかい」
「ああ」
「聞いてくれるかい」
「かいかい、うるせぇよ。はよ、しゃべれや」

「いいだろう、そこまで聞きたいのかなら聞かせてやろう、死のレクイエムを」
「・・・・・・・・次いったら、切るぞ・・・お前の首を」
「・・・分かりました。では話すよ。俺さ、デートしちゃって、もう大成功」
「・・・ぷち」
「んっ、もしもーし、あいつ切りやがった」
無敵　王はすぐにリダイヤルしかけなおした。
「・・・・こちらの番号は、電波の届かないところにあるか、電源が入っておりません」
「・・・・・・・あいつ。よし、こうなったら、会いに行くか。いざ、いっちゃんのマンションへ」
こうしてオウ　ムテキは朝の町へと旅だった。早朝の風が冷たかった。ピューピューってね。

# 第１０章

なぁー夏が暑いってどうしてか分かるかい？それはね。恋の季節だからさ。
分かるかい？いや分かるまい。いや分かるのかな？分からない？君は馬鹿か。春夏秋冬ってあるだろ。春は出会い、夏は恋、秋は青春、冬は別れって言う言葉があるだろ。知らない、まぁいい。今、僕は、プールに来ている。誰とだって、そんなの一人でさ。あ、今さみしい奴だと思っただろ。でも違うの、これはねデートの下見さ。何事も用意周到が理想である。
例えば、僕は気づいた。ここの位置は日当たりにいいということを。そして、眺めもいい。若いギャル達の水着姿をどうどうと見られるからな。なーんちゃって、だが、僕は興味がない。おっと、興味がないといっても、若いギャル達にだよ。なぜだって、それはね、僕には春さんがいるからね。春さんに比べたら、どいつもこいつも、背景だ。他にもアイスが春さんなら、水着のギャルたちはコーンだ。そういうことを考えているとビーチボールが転がってきた。
「すいませーん、ボール取ってください」
水着のギャルが声をかけてきた。
「いいよ。はいそーれ」
僕はビーチボールを彼女たちに投げた。
「ありがとうございます」
僕は笑顔で手を振っていた。
その時、僕は仏のように包容力があると思ったね。僕の目は春さん一色だから、それ以外の女性はじゃがいもに見える。
よし、この場所は二重◎、僕は頭の中に刻みつけた。
すると、そこにある男があらわれた。
「この世の楽園って知ってるか？それはここのプールだよ」
「・・・・・」

僕は無視をした。
「なぁ、王よ。プールの語源を知ってるかい、いや、君は馬鹿だから知らないだろう。ならば教えてやろう。プール　（Ｐｏｏｌ）とは、レクリエーションあるいは水泳競技（競泳、水球、シンクロナイズドスイミング、飛び込みなど）のために、人為的に水を溜め込んである空間または施設である。英語では、ｐｏｏｌは単に「水溜り」を指して、水泳用のプールのことはｓｗｉｍｍｉｎｇ　ｐｏｏｌと呼ぶんだ。どうだい、ためになっただろ。それでは一緒にタッキーダンスを踊ろうか？タッキーダンスはちゃちゃちゃから入るんだよ。ほら、タッ、キー、キー、タッ、キー、キー、タッ、キー、キー、タッ、キー、キー。ほら王も。レッツタッキーダンス」
そう、オタッキー武田が王の前に現れ、手を指しのばした。
僕は、無視をしたら、かってに踊り始めた。
「ふふ、君はシャイだね。なら見てるといい、ほら、次はルンバのリズムでタッキー、タッキー、タタッタッキー。タッキー、タッキー、タタッタッキー」
そのあと、驚くべき現象が僕の目の前に広がった。
なんと、武田が踊っている後ろに、人々が集まって踊りだした。
「・・・・・なんだこりゃ」
武田は歌いだした。
「さぁ、いくぜ、ミュージックスタート」
突然、武田はマイクを出した。

ｓｏｕｎｄ　ｏｆ　ｍｕｓｉｃ　ｇｏｉｎｇ　ｓｔａｒｔ
ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ
ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ　ｔａｋｉ
ｔａｋｉ
空を見たらー　ぼくはいーたー
空も飛べないのに　ぼくはいたんだーぁー

ぼくはぁー死んでいた。
はい、タッキータッキーオタッキー
はい　タッキータッキーケンタッキー

武田がプールサイドで歌っていた。というよりミュージカル見たいだった。
なぜなら、僕以外の全員が武田のバックダンサーを務めていた。
僕は思った。ここのプールでデートはだめだと。やはりプールより海だと。
夏の日差しが眩しかった。プールプールと。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1065i/

春夏秋冬　The Season Story

2010年10月28日08時13分発行